

太鼓で鍛えた粘り強さで 電気の流れをつかさどる “管制官”



〔長野支店 長野給電制御所〕

管轄エリアは長野県北部、東部、中部。人口約120万人、世帯数約47万5千戸。主に15万4千ボルト、7万7千ボルト以下の送電ルートを常時監視・運転している。そのほか、故障復旧操作、保守・点検作業のための設備停止操作、気象情報収集、発電調整などを行い、良質で安定した電気の供給に努めている。

家族同然の連帯意識で
24時間365日

電気の円滑な流れを監視

電気はためておくことができない。したがって、需要（電力消費量）と供給（発電量）の調整は、系統運用部門にとって重要な使命だ。需要は、一日の中でも時間帯によって異

なる上、曜日や天候・季節・景気動向・イベントによっても左右される。そのような時々刻々と変化する電気の需要に対し、供給を24時間365日体制で監視・調整しているのが「中央給電指令所」である。また、50万ボルト、27万5千ボルトの電力系統の監視・運転を行っているのが「基幹給電制御所」、主に15万4千ボルト以下の電力

系統の監視・運転を行っているのが「支店給電制御所」である。なお、支店給電制御所は、中部電力管内に11カ所点在している。

長野支店長野給電制御所の指令制御課に勤務する本田晃浩は、入社4年目の2003年以来、給電制御畑一筋に歩んできた。

「給電制御所は、良質で安定した電気をお客さまにお届けする『電気の管制塔』であり、そこで働く指令制御員は電気の流れをつかさどる『管制官』や『頭脳』に例えられます。最初の配属先（塩尻電力センター）の研修で、故障が発生した途端に系統盤を見ていた指令制御員の目つきが変わり、慌ただしさの中で、テキパキと復旧の指示を出す姿を見て、『責任重大だけど、安定供給を支えるこんな仕事に就きたい』と、給電制御所への転勤を自ら志願しま

した」

「系統盤」とは、指令制御の際に電気の流れがひと目で分かるように発電所や変電所、それらをつなぐ送電線の運転状態を表示するものである。

指令制御員は、故障現場に赴くわけではなく、系統盤を監視しながら電気の流れをコントロールし、故障復旧操作、作業のための停止操作、発電調整などを行う。指令制御課では、電気の使用状況を収集・記録したり、停電情報を把握・伝達する。河川と水力発電所の状況を表示する水系盤などの情報機器・端末も並ぶ。電気の流れを円滑に運用するためには、多くの情報を収集しなければならぬ。

「例えば、設備点検や補強工事のために送電の設備を停止する場合、あらかじめ電気のルートを切り替え





本田晃浩 (ほんだ・あきひろ)
 中部電力長野支店長野給電制御所
 指令制御課勤務。2000年4月中部
 電力入社後、塩尻電力センター発変
 電課に配属。'03年8月長野給電制御
 所、'06年8月飯田給電制御所('08年
 松本給電制御所に統合)、'08年12月
 名古屋給電制御所、'12年8月松本給
 電制御所異動を経て、'15年8月より現
 職(取材時点)。'16年8月、長野支店
 長野電力センター発変電課へ異動。

Voice of the spot

「系統盤」には、発電所や変電所を
 つなぐ送電線の状態をはじめ、あらゆる
 情報が集約、表示されている。



「訓練シミュレーター室」で、月に1回、まる一日かけた本番さながらの訓練が行われ、その後の
 検討会でも真剣な議論が戦わされる。

定したシミュレーター訓
 練を行い、知識と技能の
 向上に努めている。チー
 ム訓練1回、個人訓練3
 回を実施した後、検討会
 が行われる。

「故障範囲を特定した
 り、迂回させる電気の流
 れを設定しなければなら
 ないのですが、不適切な
 指示を出そうものなら
 『どうしてそこが故障箇
 所だと思うんだ!』『設
 備の容量を考えたら別ル
 ートの方が適切じゃない
 のか!』といったげきが
 飛んできます。万が一、

て、お客さまが停電しないような流
 れをつくりあげます。そのために、
 発電・変電・送電・営業といった多
 くの関係部署との連携を通じた情報
 も集約しないと適切な判断は下せま
 せん」

長野給電制御所指令制御課のスタ
 ッフは現在、課長、操作計画班、運
 用班を合わせて24名。そのうち16名
 が4名ずつ4班に分かれて、夜勤と
 日勤の勤務シフトに基づき、24時間
 365日体制で指令制御の業務に就
 いている。

「いったん系統盤の前に着くとト
 イレ以外はそこに缶詰め状態。系統
 盤をにらみながら食事もとります。
 シフト時間内は、その場で常に4名
 が行動を共にしているので、班員は
 家族同然。固い絆と信頼関係で結ば
 れています」

月に1度のまる一日かけた シミュレーター訓練で 知識、技能の向上に努める

長野給電制御所の管轄エリアは県
 内の北部、東部、中部地区で、北ア

ルプスをはじめ、ほぼ全域が豊かな
 自然に囲まれており、自然災害も多
 い。特に山間部は土砂崩れや雪害な
 どに見舞われることがあり、指令制
 御員はあらゆるケースを想定してお
 く必要がある。また、水力発電所の
 発電予想や実績記録を「中央給電指
 令所」などへ報告したり、「基幹給
 電制御所」との連携も欠かせない。
 所内には、給電制御システムと同
 じ機能を備えた「訓練シミュレータ
 ー室」が設けられており、月に1度、
 まる一日使って電力系統の故障を想

工事に伴う停電の最中に、誤認によ
 って電気を流そうものなら、人命に
 かかわる事故につながりかねませ
 ん。各班の責任者である指令制御長
 といえども、一人で、指令・制御操
 作の二役を担うことは禁じられてい
 ます。毎月、厳しい訓練を行ってお
 り、訓練に終わりはありません」
 「いざ停電になったとき、お客さ
 まに負担をかけない。万が一のとき
 は、お客さまの負担を最小限にとど
 めるため、早期に復旧する」という
 強い使命感を持ち、作業にあたる。



組太鼓で味わえる息の合った演奏が本田にとって何よりの醍醐味だ。

それは、各班の結束力、信頼関係を強固にし、家族意識を高め、一糸乱れぬ「あうんの呼吸」を生む。

本田は、仲間と仕事を進める上で「相手に対する思いやり」を意識しているという。業務を引き継いだり、依頼する場合、問い返さなくても分かるように配慮する。

「災害復旧対応に取り組む原動力となっているのは、お客さまに早く電気を届けたい、と願う気持ちです。日ごろからの仲間との信頼関係があるからこそ、故障時には確実かつ迅速に対応ができる。その積み重ねに

よってお客さまとの信頼関係も築くことができると思います」

15年3月の早朝、長野県北東中部（長野市・上田市・松本市・安曇野市など）の広範囲にわたり大規模な停電が発生した。「暖房がつかず寒かった」「村役場へ電話が殺到して大変だった」といった声のほか、「あなたも復旧作業で大変だったでしょう」というねぎらいの声もかけていただいた。「そんな地域の方々の声を聞き、感謝の気持ちと共に、本当に電気はなくてはならないものだと改めて痛感しました」という。

仲間と奏でる組太鼓で 全てを受け入れる姿勢 チームプレーの醍醐味を知る

本田が仕事以外で夢中になっているのが、大小の太鼓を大勢でたたく組太鼓だ。生まれ育った上田市真田町の太鼓サークル「六文銭太鼓」を皮切りに、転勤した先々のサークルに加入してきた。15年2月に長野市に隣接する筑北村に引っ越してからは、地元にある「四阿屋こたま太鼓」に所属。太鼓を通じて出会った妻ともども、地域のイベントを中心にさ



「子ども後輩に恥じない生き方をしたい」

まざまなボランティア活動に参加している。また、小学生を中心としたチームと、中学校の授業の一環で行う太鼓体験の指導も行っている。最近、長男が太鼓を始めたが、やがては3男1女を含めた家族6人でチームを組むのが本田の夢だ。

太鼓の魅力は「お互いのクセ、リズムが分かかってきて、演奏中の研ぎ澄まされた集中力の中で、まさに『あうんの呼吸』でたたき合うとき』だ」という。今まで8つの太鼓クラブを体験した過程で、まずは人間関係も含め、否定することなく全て受け入れることを心がけるようになった。「人は概して、一つの方法が正しいと思うと、ほかの方法は間違いだ」と否定しがちです。しかし、いろいろな打法や表現方法を習得することで、答えはひとつではない、まずは、

全てを受け入れて、その後に自分のカラーを出していけばいいんだと思えるようになりました。それは仕事も同じ。お客さまや職場の仲間に対して否定的な気持ちで接するのではなく、まずは受け止める姿勢で接したいと思っています。そうして互いに認め合うことで、信頼関係が生まれ、緊急時の復旧作業でも『あうんの呼吸』のチームプレーで対応できるのです」

今年から電力の小売全面自由化、社内カンパニー制度もスタートし、取り巻く環境が変わった。本田の仕事もこれまで以上に多くの課題に直面するようになった。例えば、太陽光発電量の増加に伴い実際に電気を使用している量の把握が困難になりつつあり、作業計画や故障復旧時に苦慮する場合もあるという。

「もちろん、故障時などの対応は万全の体制をとっていますが、どんな時でも、どんなトラブルに対しても、組太鼓で培った粘り強さで最後まで諦めず課題に向き合い解決していきたい」と、本田は力強く話した。